

すなわち、西区画が構築された際に造られたのは西土塁南小口である。西土塁北小口は西区画が完成した後に、一部土塁も含めて改修され、新たにつけ加えられた可能性が考えられる。しかし、西土塁北小口の新設が東区画が拡張付加される以前の段階なのか、以後の段階なのかは明らかにすることはできなかった。

3. 建物址

合計12棟の建物址と6箇所の柱穴群を検出している。建物址かどうか断定できない柱穴群を除くと、大半の建物址は東区画に集中し、その一番南の部分に庭園址が配されている。一方、西区画では建物址の検出は少ないが、下層により古い時期の遺構面が存在している可能性が高い。第2号庭園址などにその片鱗を見ることができる。

第32図にみるように3・4・5・6号建物址（A群）の軸線は、東土塁に併行し、北から西に約5度程ずれている。一方、1・7・8・9・10号建物址（B群）はほぼ真北を向いている。両者は建物の軸線がややずれることから、建築時期がやや異なると考えられるが、ほぼ同時期に併存使用されていたと考えられよう。また、庭園址は3号建物址と境界を共有することから、建物址と同時期と考えている。

A群建物址は互いに隣接して南北に配され、規模も大きく、A群の最も南に位置する3号建物址は庭園に接するなど居住空間や接客空間、7・8・9号建物址は同範囲に確認された大量の焼米などから、貯蔵空間の機能と考えることができるかもしれない。

第2節 出土遺物について

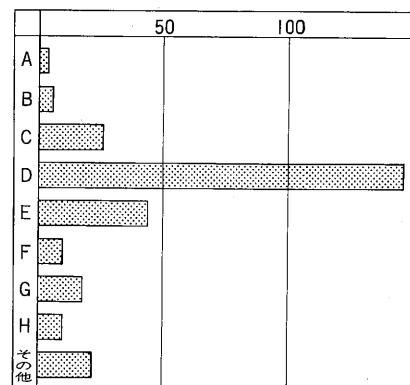
1. 中世土師皿

(I) 分類

中世土師皿は先述したように、形態上の特徴からA類～H類まで8類に分類した。また、各類はその大きさによって大中小に分類した。

形態の分類可能な個体数は全部で217個体ある。その内訳はA類が2個体、B類が3個体、C類が13個体、D類が123個体、E類が47個体、F類が5個体、G類が9個体、H類が5個体、その他が22個体となる。D類が最も多く全体の56%を占め、次に多いのがE類で、全体の22%を占めている。D類とE類で全体の80%を占め、本館跡出土の中世土師皿の主体をなしている。

各類の大形の口径の平均はいずれも12cm以上あり、中形は9～10cm、小形は7cm内外となっている。



第34図 各類の個数

	口径 15cm	器高 5 cm
A1		
B1		
C1		
F1		
A2		
B2		
C2		
D2		
E2		
G2		
H2		
C3		
D3		
E3		

第35図 各類の法量

(2) 胎 土

胎土にはおおむね粉質で色調がやや白みがかるものと、細かい粒子を含みやや荒めで褐色味の強いものに大きく分けることができるが、その間に中間的なものもある。前者の粉質で白味の胎土を持つものはA類・B類・C3類があり、後者のやや粗く褐色の胎土を持つものにはC1類・D類・E類・G類・F類・H類がある。C2類は中間的な様相をもつ。

粉質で白味の強い色調のものは、本館跡では出土量の少ない類に限られている。この類に含まれるA類は手づくねであり、白カワラケとされるものとよく似ている。B類は成形技法が確定できないが、手づくねの可能性が強く、やはり白カワラケと似ている。ただし、C3類は回転台を利用して成形されており、色調もやや黄色味が強く、A類、B類と分けて考えた方がよからう。A類・B類は量的に少なく、成形方法、胎土とも、出土量の多いD類・E類と異なることから、他地域から搬入されたか、あるいはそれに習って製作されたものと考えられよう。

ところで、在地製の中世土師皿に混じって、他所から搬入された中世土師皿が存在することは鎌倉でも確認されている。鎌倉では搬入された中世土師皿は京都系のもの（白カワラケ）であると考えられ、搬入された時期は14世紀代までとみられている。

本館跡出土のA類・B類が、鎌倉と同様に京都系の白カワラケとされるものであるかどうかは、筆者の力量では確認できない。文献史料によれば高梨氏は15世紀代から16世紀前半にかけて、京文化と積極的に接しており、そうした背景も十分に加味する必要があろう。

(3) 成 形

A類・B類を除いて、他の類はすべて回転台を利用して成形されている。底部には糸切り痕跡がいずれも残っている。また、大半の底部には板状圧痕が観察できる。さらに、見込み底部には、指によると思われる強いヨコナデが観察される。体部はヨコナデされているが、一段と二段のものがある。

(4) 底部円柱づくり

観察した中世土師皿の底部内面と外面両方に、糸切り痕跡が認められるものが一例ある。これは、福田健司氏が指摘した低部円柱づくりによって成形された痕跡と考えられる。

底部円柱づくりは10世紀段階以降の須恵器杯成形に認められる技法で、「I、粘土塊をロクロないし回転台の上にのせ杯の底部と同径の円柱をつくる。II、この円柱の上部に粘土紐を巻き上げ体部を形成する。III、ロクロないし回転台をナデを繰り返し器内を均等に調

整する。この時、内面をかなり丁寧にナデるために内面の糸切りはなし痕跡は消えてしまう。IV、このようにして、成形、整形した杯を糸によって円柱から切り離す」技法である（福田 1979）。

底部円柱づくりの確認できた例は一例のみであったが、おそらく回転台を利用する本館跡出土の中世土師皿はこの方法で製作されたと考えられる。本館跡出土の中世土師皿は14世紀代以降のものであり、10世紀からは相当期間が経過しているが、おそらく、古代に現れた須恵系土師器（ロクロ土師器）の成形技法の延長線上にあるのではあるまいか。県下では14世紀代を境に手づくね成形のものから回転台成形のものへ交代すると考えられている。回転台成形のものが、古代からの成形技法を踏襲しているとすれば、このような事象をどの様に理解すべきか、興味深い課題である。

(5) 中世土師皿の年代

中世土師皿は形態のうえから8類に分類できたが、これらは製作の地域差・製作者の違い、あるいは時間差を示していると考えることができよう。A類・B類は胎土・成形技法の違いなどから、地域差が大きく反映しているものと推測される。一方、その他の類は、一般的に中世土師皿が在地性のものであると考えられており、胎土もよく似ていることから、時期差を示していると考えることができよう。

しかしながら、調査ではこれらの時期差を知る手がかりは得られなかった。本遺跡から出土した陶器はわずかであるが、年代を知り得るものが二例ある。一方は珠洲焼のかめ形土器で14世紀後半（吉岡編年 第IV期）のものであり、他方は越前焼のかめ形土器で16世紀後半のものである。このような状況からみて、本館跡出土の中世土師皿も概ね14～16世紀という年代幅をもつものと思われる。

しかし、中世土師皿の地域編年が完成されていない現時点では、これ以上の細かい年代について言及することはできない。そこで、比較的資料の整っている他遺跡の出土資料との比較を通して、この点について若干の検討を加えてみたい。ただし、比較資料については、時間的余裕の無さや筆者の力量不足もあり、県下の管見にみられたもののみにしたい。

(6) 県下（千曲川水系）の中世土師皿の様相

①佐久市大井城跡では70点の中世土師皿が報告されている。これらは回転台を利用して成形され、体部に強いヨコナデ痕をもち、底部および底部からの立ち上がり部の器壁が厚く、口縁端部で急に薄くなる特徴をもっている。また、口縁部が外反するものと、わずかに外反傾向をもつものとがある。報告者は前者をA類、後者をB類と呼称し、両類とも大・中・小に分類されると指摘している。形態的にも製作技法の上でも、本遺跡でF類・G類と分類したものに近似する。大井城跡ではこれらの土師皿に伴って、14～16世紀の陶器が出土しているが、土師皿と明確に伴出したものではなく、土師皿の細かい年代を決定するこ

とはできないとされる。しかし、鎌倉における服部編年第IV期の中世土師皿と形態上の特徴が一致するとして、16世紀代という年代を与えていた。

②長野市栗田城跡からも比較的多くの中世土師皿が報告されている。ここでは、手づくね成形によるものと回転台成形によるものとの二者があり、圧倒的に回転台成形によるものが多い。回転台成形のものは形態的に二類に分けられる。一方は、底部から外反しながら直線的に体部が立ち上がり、底部からの立ち上がり部分に強いヨコナデが一段認められるものである。他方は、底部からやや内湾気味に体部が立ち上がり、立ち上がり部と口縁部に強いヨコナデが認められるものである。両者とも大・中・小に分類される。こうした形態、成形技法のあり方から、前者は本館跡資料のH類、後者はD類に相当するものと考えられる。この例でも明確な年代は明らかにされなかったが、伴出したその他の資料から、14~15世紀前半の年代が考えられている。

③下諏訪町殿村・東照寺址遺跡では、約40点ほどの中世土師皿が報告されている。A類~E類に分類され、A類は手づくね成形によるもの、B類は底部に糸切り痕を残すもの、C類はろくろ成形によるが堅い焼成のもの、D類はいわゆる内折れかわらけ、E類は底部に穿孔されるものである。そして、手づくね成形によるA類は13世紀前半から後半、回転台成形のB類は13世紀末葉から14世紀代、回転台成形され堅く焼成されたC類は15世紀から16世紀の年代が与えられている。また、C類は北関東や福島県で出土している「ロクロ目が顕著に残る土師質土器」との関連性が指摘されている。このC類は本館跡のG類との類似性が考えられる。

(7) 変遷段階

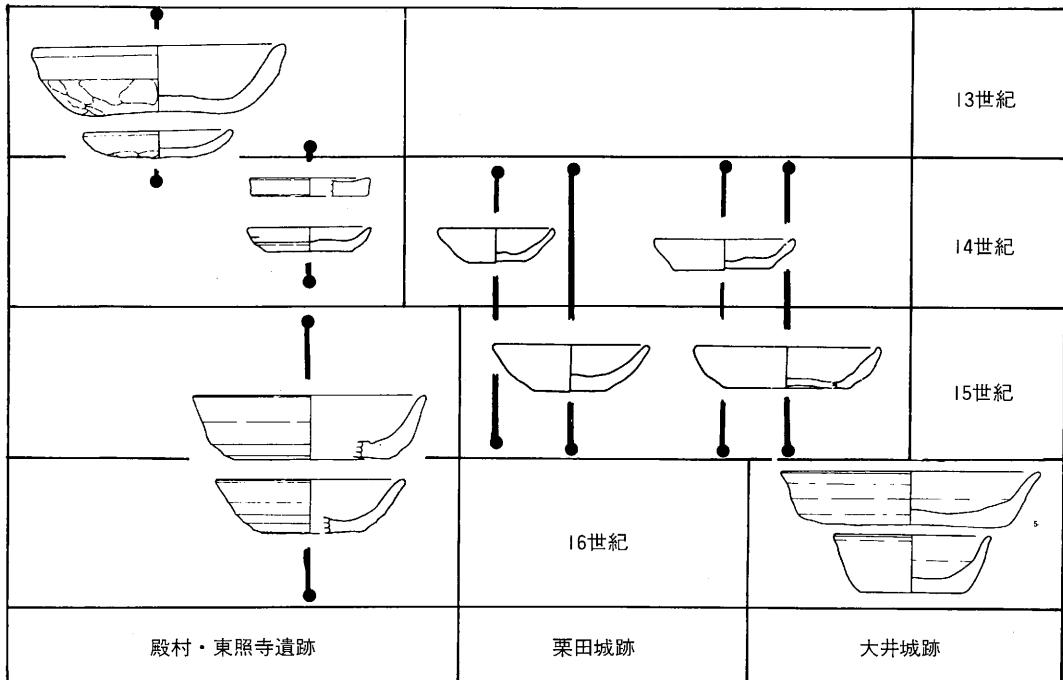
以上、量的に少なく、決して十分とは思えないが、これらの資料からある程度の長野県における中世土師皿の変遷過程を知ることができよう。そこで、これらの資料を用いて長野県（選択した資料が千曲川沿岸に偏っているが）の中世土師皿の変遷を考えてみたい。

まず、13世紀代の資料には殿村・東照寺遺跡第I期前半の資料があてられる。やや内湾する体部をもち、手づくね成形されるものである。

14世紀代に限定される資料は殿村・東照寺遺跡第I期後半の資料である。体部が低く、回転台成形される一群で、いわゆる盤状かわらけとされるものである。

ところで、栗田城跡出土資料は14世紀末から15世紀の年代が与えられるものと考えられている。この一群には、(a)手づくね成形されるもの、(b)回転台成形され器高が低く一段の強いヨコナデのもの、(c)回転成形され、やや内湾した体部をもち二段の強いヨコナデが観察されるものがある。

14世紀代に比定される殿村・東照寺遺跡第I期後半の資料と、栗田城跡の資料を比較すると、(b)としたものが、形態上の殿村・東照寺遺跡第I期後半の資料と類似しているが、器高が高くなっている、それよりは新しいものと考えられよう。また、(c)としたものは、



第36図 中世土師皿の変遷

殿村・東照寺遺跡には認められず、おそらくこの時期より、新しい時期に出現するものと考えられる。そこで(c)は、14世紀代でも新しい時期から15世紀代と考える必要があろう。また、栗田城跡では、(b)としたもののなかにも、やや器高が高いものがあるが、新しい(c)としたものと関連させて考えれば、やや後出的な要素が加わっているからと考えられる。

15世紀代に限定される資料はないが、栗田城跡出土資料のなかで、新しいと考えた一群、回転台成形され、底部からやや内湾気味に立ち上がり、体部の立ち上がり部と口縁部に強いヨコナデ痕を残すもの、すなわち、(c)としたものに相当すると考えられる。

殿村・東照寺遺跡第II群の資料は、15世紀から16世紀の年代が与えられているが、こうした形態は、15世紀代までと考えられている栗田城跡出土資料中には認められず、16世紀代に比定される大井城跡出土資料との類似性が強く、16世紀代の可能性も考えられよう。

16世紀代に比定されるのは、大井城跡出土資料であろう。回転台成形され、体部に強いヨコナデ痕を残し、底部と立ち上がり部の器壁が厚く、口縁部で薄くなる一群である。

(9) 編年と各類

長野県（千曲川水系）の中世土師皿は、以上、概観したような変遷過程を遂げたものと思われる。これら各時期の中世土師皿と本館跡の中世土師皿の各類を比較すると、それぞれが各期の中世土師皿と類似性をもっていることが明らかになる。

第I期：13世紀代

本館跡では出土していない。

第II期：14世紀代

本館跡のH類（器高が低く、立上がり部に一段のヨコナデが認められる類）がこの段階に相当するものと考えられる。

殿村・東照寺第I期後半の資料、長野市栗田城跡出土資料(b)類の段階である。二遺跡の資料を比較すると、前者は器高が低く、後者はやや器高が高い。おそらく、新しくなるにしたがって、中世土師皿の器高は高くなるものと推測されることは先述したが、本遺跡のH類はやや器高が高い栗田城跡(b)類に、より類似する。したがって、14世紀代でも、より新しい段階に位置づけられるものと考えられる。出土量は少ない。

第III期：15世紀代

本館跡出土のD類・E類が相当すると考える。D類はやや内湾しながら立ち上がり、二段のヨコナデをもつ類、E類は底部から体部が外反するように立ち上がり、D類のように明確なヨコナデの痕跡を残さない例である。

本館跡D類は栗田城跡(c)類と類似する。両者を比較すると、本館跡D類はやや器高が高い。両者の違いは地域差なのか、時間差によるものか、にわかに判断できないが、中世土師皿の器高が新しくなるにつれ高くなる傾向があり、時間差が原因ではないかと考える。

一方、本館跡出土のE類の類例を探すことはできなかった。E類は体部が直線的に外反することや二段のヨコナデが認められないことなど、形態的には栗田城跡(c)類や本館跡D類と大井城跡出土資料との中間的な様相を持っていると考えられ、本館跡D類よりも新し

		個数
II		5
III ₁		123
III ₂		47
IV		14

第37図 高梨氏館跡出土の中世土師皿の変遷

く、大井城跡資料より古い段階のものと考えておきたい。

第IV期：16世紀代

本館跡G類・F類が相当すると考える。両類とも強いヨコナデが施され、あたかもロクロ目のような痕跡を有すること、体部立上がり部や底部の器壁が厚いことなど多くの類似点をもつ。

以上のように、本館跡出土の中世土師皿の各類は、14世紀代から16世紀代にかけてのものであると考えられる。量的にはD類・E類が出土量の80%を占めており、15世紀代の中世土師皿が圧倒的多いということができる。

なお、A類・B類・C類の類例を得ることができなかった。今後の課題としたい。

(中島庄一)

第6章 まとめ

調査成果について簡単にまとめておきたい。

戦国時代には、戦国大名クラスの武将が、(1)城郭とは別に居館を構えたものと、(2)城郭を構えるだけの力をもたない武将が防御と生活の場を兼ね備えた居館を構える場合の二者がある(河原 1990)。一乗谷朝倉館跡(福井県・東西100m、南北120m)、江馬氏の江馬下屋敷跡(岐阜県・東西100m、南北100m)が前者の代表的な例といえよう。

高梨氏館跡の背後には、山城である鴨ヶ嶽城が存在し、居館は東西約120m、南北約100mの規模をもつ。同時に、居館の周囲には東西約300m、南北400mの広い「館回り」を配して、外郭を形成している。居館の規模だけを比較すれば、かなり大きいものと評価して良いであろう。また、高梨氏館跡に戦国大名クラスの武将の居館に共通する苑池を中心とする庭園施設が存在していたことも特筆すべきである。まさに、高梨氏は戦国時代、北信濃最大級の領主であったとることができよう。

また、出土遺物の検討から、高梨氏館跡は14世紀の比較的新しい時期から16世紀代にかけて存続していたと考えられる。本調査で確認した遺構面の下層に、古い段階の遺構が存在することが予測されるので、その成立期をにわかに断定できないが、本報告で推定した中世土師皿の編年が正しいとすれば、おそらく14世紀の後半には周囲を何らかの形で区画した館が成立していたものと考えられる。

さらに、土壘の調査所見等から、現況の土壘は西側部分が先行して造られ、後に東側部分が拡張附加された可能性が指摘される。とすれば、高梨氏館跡は、(1)築地塀が存在した段階、(2)西側区画の段階、(3)東側区画が拡張附加された段階と、大まかに三段階の変遷を遂げているものと考えることができる。各期の実年代については明らかにすることはできなかった。